

第1回歴史から紐解く人と川との共栄

～畏敬の念から生まれた流域の文化～

日 時：平成17年10月13日（木）18：00～20：00

会 場：ホテルニューオータニ長岡・NCホール（長岡市）

ゲスト：稲川明雄氏（前長岡市立中央図書館長）

ホスト：豊口 協氏（長岡造形大学理事長）

（司 会）：皆様、大変お待たせいたしました。ただ今より、「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』」を開校いたします。

本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。

本日の司会進行を務めさせていただきますFMながおかの古塩碧（こしお・みどり）と申し上げます。どうぞよろしく願いいたします。

さて、「信濃川自由大学」は信濃川の自然や歴史など、その魅力を地域の方々に広く知っていただくために開校し、この長岡会場からスタートいたします。来年5月まで、毎月1回、各地でこの「信濃川自由大学」が開催され、毎回信濃川にゆかりのあるゲストをお迎えし、お話を聞かせていただきます。皆様、お時間がございましたら、是非、ご参加ください。

はじめに主催者を代表いたしまして、新潟日報社読者文化センター長永田幸男よりご挨拶申し上げます。

（永 田）：皆さんこんばんは。

ご紹介いただきました、新潟日報社の永田といいます。開校にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

このたび、国土交通省様と共催によりまして、このような信濃川自由大学を開校する運びとなりました。私たち新潟日報社といたしましても、このような形で長期連続の市民講座を開催いたしますのは初めての試みでございます。

改めて申し上げるまでもございませませんが、広大な越後平野は、信濃川が作りだしてきました。その豊かな水と大地が新潟の暮らしと産業を支え、そこに生きる人たちの実り豊かな秋を迎えさせ、そして交通を支えてまいりました。しかしながら、一方では川はまた、私たちに度重なる災厄をもたらしております。昨年の7月の大水害が記憶に新しいところでありますが、しかしその災害に立ち向かい耐え抜くことによって、新潟県民はねばり強い、あるいは心優しい気持ちを育んできたといえることと思います。まさに越後平野だけではなく、人の心も文化も信濃川が育んできたといえるのではないのでしょうか。

先日、この同じNCホールで、新潟日報主催の「日報短歌フォーラム」を行いました。そのときに、短歌フォーラムの選者をお願いしておりました歌人の馬場あき子さんが、このような感想をもらしておりました。県民から700首の短歌が応募されたのですが、その中に、実に多くの川とか信濃川が歌いこまれておりました。馬場先生はそれを読みまして、新潟の風土ごと立ち上がってくるような感銘をおぼえたというふうな感想を述べておられました。まさに新潟の風土そのものを、信濃川が作ってきたのではないかという実感をいたしました。

河川行政も、従来の治水優先から地域と共に生きる川というふうに、大きく流れが変わっております。まさに川を語ることは地域を語ることにほかなりません。

これから来年の5月まで、ほぼ月1回のペースで、この信濃川自由大学「われら信濃川を愛する」というタイトルで開かれます。会場は、今回の長岡を皮切りに、新潟、三条、十日町、川口、見附、まさに信濃川流域市町村を移動しながらの画期的な講座というふうを考えております。毎回多彩なゲストをお迎えいたしまして、歴史、文化、産業、暮らし、さまざまな切り口から信濃川の姿に迫っていきたくて考えております。せっかくの機会ですから、単に勉強するだけではなくて、川と共に生きる地域づくりの出会いの場として育てていけたらなと考えております。

最後になりますが、ご参会の皆様のご理解とご支援をお願いいたしまして、開会のご挨拶とさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

(司 会) : ありがとうございました。

続きまして、本日の開催地である長岡市の市長、森民夫様よりご挨拶をいただきます。

(森) : 皆さんこんばんは。

信濃川自由大学という大変すばらしい企画をしていただきました。第1回を当長岡市で開催していただきますことに、心から御礼を申し上げたいと思います。国土交通省信濃川河川事務所並びに新潟日報さん、大変心からお礼を申し上げたいと思います。

今日の豊口先生と稲川さんのお話は、多分大変面白いお話になると思います。特に歴史と信濃川ということになりますと、これはもう私が申し上げるまでもなく、鉄道や高速道路ができる前は、川はとにかく交通の要だったわけですから、信濃川沿いに人の交流あるいは文化の交流、さまざまな歴史が込められているはずでございまして、そういうお話が、今日聞けるのではないかと思います。

長岡市はご承知のように新しい長岡市になりまして、1月1日にはさらに四つの市町村が加わって、全部で10の市町村が合併いたします。長岡の市歌の歌詞を今募集しております。山古志、小国あるいは寺泊まで入ってくる、栃尾も入ってくるということになると、新しい長岡市のシンボルは何かというのが議論になるわけですが、これはご承知のように、例えば鋸山というのはもうシンボルになりにくいのではないかとか、蒼柴の森は旧市民にとっては大変心のふるさとなのだけれども、十の市町村になるとちょっとどうかという議論がありますが、信濃川だけは絶対のシンボルですね。どんなに市が広くなろうと信濃川は長岡市のシンボルと、これだけは間違いがないということでございまして。それだけ私たちの生活に深く関わっているのだと思うのですけれども、そういう意味で大変素晴らしい企画だと思います。本日ご出席の皆様、大変良い話を聞けるはずでございまして、是非、大学というと少し堅苦しいイメージがありますが、勉強ということだけではなくて、楽しんでいただければと思います。

この信濃川自由大学が回を重ねて、信濃川に対する理解を深めるだけではなくて、さらに愛着が増すきっかけになればと思っております。改めまして主催いただいた、ご苦労いただいた皆さま方に感謝申し上げます、私の御礼の挨拶とさせていただきます。今日は誠にありがとうございました。

(司 会) : それでは第1回講座に移らせていただきます。

今回の講座のテーマは、「歴史から紐解く人と川の共栄～畏敬の念から育まれた流域の文化～」です。本日はゲストスピーカーに、前長岡市立中央図書館館長の稲川明雄先生、ホストには、長岡造形大学理事長の豊口協先生をお迎えしております。

まずはお二人のプロフィールをご紹介させていただきます。

稲川明雄先生は、長岡市史編纂室長、長岡市立中央図書館館長などを歴任され、現在は、長岡市立中央図書館文書資料室長でいらっしゃいます。著書に「長岡城燃ゆ」「長岡城奪還」などがあります。また、共著としましては「米百俵と小林虎三郎」、「戊辰戦争全史」などがあります。長岡郷土史研究会会員でもいらっしゃいます稲川先生は、長岡をはじめ全国で活躍されています。

続いて豊口協先生は、昭和 59 年から平成 4 年まで東京造形大学学長を務められ、平成 6 年に長岡造形大学学長に就任されました。現在は理事長でいらっしゃいます。このほかにも、世界デザイン会議準備実行委員会副会長や、信濃川においても、大河津可動堰改築検討委員会委員を務めるなど、各方面で活躍されています。また作品としましては、昭和 45 年の大阪万国博覧会電気通信館、昭和 60 年のつくば国際科学技術博覧会東芝館などがございます。皆さん御存じの、長岡花火ネクタイのデザインから世界のデザインまで、幅広く活躍されています。

それでは稲川先生、豊口先生、お願いいたします。

皆様、大きな拍手でお迎えください。

(豊 口) : 堅くならないで、本当に和やかな一杯飲みながら話をするという雰囲気、是非やりたいと思っています。普通の日常生活ですと、そろそろ一杯飲んでいるところですけども、今日はおあずけになりました。よろしくお願ひしたいと思います。

皆様御存じだと思いますが、数年前から“世界水フォーラム”というのが開かれております。これは地球的な規模で開かれているフォーラムなのです。地球が生まれたときと今とは水の量は変わらない。しかし、生物が活用できる水の量は激減している。将来何年かたつと、人間を含めて生きている生命体が使える水の量が、本当にわずかになってしまう恐れがある。地球というのは生命が存在しているただ一つの太陽系の惑星でありますけれども、この美しい星をいつまでも永遠なものにしたいということで、世界の学者が集まって世界水フォーラムというのをやってきたわけでありませう。

石油や石炭は使えば無くなりますけれども、水は無くならないと思ったところが、実は使える水の量が激減している。WHOから、中国の河川の中で 80%は魚がすめなくなっているという、非常に危機的な報告も既にご覧いただけます。そういう意味で、水の重要性をもう一回考えようということで開かれたのであります。この信濃川自由大学、これは国土交通省、新潟日報もそうなのですけれども、この貴重な信濃川の水、川ですね、これを県民としてもう一度考えてみよう、考える時期がきているのではないかと。この川をいかに素晴らしい自分たちの宝として、これから新潟の誇りとして保っていくべきなのかということと一緒に考えようという企画なのです。

私が 12 年前に初めて長岡に参りましたときに、信濃川の東側の土手に立って夕日の沈んでいくのを見たのです。もう何と云うか涙が出ました。美しい、こんな美しい夕焼けはしばらく見たことがなかった。60 年間東京にいましたけれども、東京の夕日というのは、溶鉱炉の中の塊みたいなもので、真っ黒けなんですね。ところがここの夕日は本当に美しかった。しかも川面を吹いてくる風に香りがあった。橋を渡れば 15 分かかりますけれども、その 15 分の時間の変化というのが、夕日の川に反射する光で感じられる。初めて私は地球が動いている、地球が回っているという感じを、長岡に来て実は知ったわけです。心で感じたわけです。それからしばらくして、魚を釣っている人がいない事に気がつきました。信濃川に魚はいないのかなとも思ったわけですけども、実際には魚がいる。1 万匹に近い鮭が、今でも長生橋の下を遡上し

て上流へ行っているわけです。生きている川がここにあったのだということも、しみじみと感じました。

人が来ない川はだめだと言われます。パリのセーヌ川は人で埋まっているわけです。一日中あそこの川岸に座って、時間を過ごしている人がたくさんいる。世界から人々がセーヌ川を見に来ている。たしかにそういう意味では人と一緒に生活をし、生きている川なんだろうと。魚もいなくなればその川は死んでいる、やはり川に魚がすんでいるということは、生きているのだと。鳥が飛んでくる、これも生きている、植物が成長している、これも生きているんだと。そういう生きている川として、信濃川をもう1度私たちは考えるべき時期がきているのではないかという気がしております。

次に疑問に思ったのが、この長岡地域の歴史なのです。何で長岡城というのは平地にあったのかということなんです。川岸に建っていたわけです。当時の殿様は、市民と一緒に目の高さで街を見ようとされたのかどうか分かりませんが、実は平地にある。戦いの城ですと山の上に建っているわけですが、平地にある。この辺から、長岡と信濃川との関係のいろいろな歴史的事実について、興味を持ちはじめました。

今日は稲川さんに来ていただいています。長岡の歴史だったら右に出る人はいませんから、とにかくとことんお話をさせていただきたい。なぜ長岡に、この長岡城というお城ができたのか、最初お聞きしたいと思っております。よろしくお願いします。

(稲川)：稲川でございます。よろしくお願いします。

こういう所に立ったのは久しぶりで、背広を着ましたら何か着心地が悪くて、どうしたら話ができるか分かりませんが、豊口先生のお引き出しでやってみたいと考えています。今ほど、長岡藩と川の話が出ましたが、長岡城は川のすぐそばにできたことはご承知だと思いますし、長岡藩という藩は、大体信濃川に沿って領地がある。栃尾が少し違うぐらいで、ほとんど長岡藩領は信濃川流域に集中しているんですね。こういうのがなぜそうなのかという話を、少しずつ話してみたいと思っております。

ご承知のように、長岡の街は川から恩恵を受けたわけですが、前述したように長岡藩7万4千石の領地の大部分は信濃川流域にあるのです。よく考えていただくと越後そのものの耕作面積は信濃川の支川も含めて恩恵を受けていない所はない。信濃川の流域には三条とかいろいろな所がありますが、新発田藩と長岡藩と村上藩が領地にしていました。こんなことを言うと悪いですが、それらの間では今でも仲が悪いですよ。長岡は新発田の人とは仲が悪いとか何とか言いますが、戊辰戦争で仲が悪くなったわけじゃなくて、実は、昔から川をめぐる問題がいっぱいあったわけです。

こちら辺を今日はお考えいただきたいのです。水争いで、川の堰を一段、二段で死人が出たというんですね。一段、二段で死人が出たということは、水をどういうふうにして利用するか。はっきり言えば、先ほど永田さんが洪水の話をしていましたが、水の恩恵というものが常に事件を起こしていたということがありますので、実をいうと藩そのものも、信濃川をどういうふうにして押さえつけるかというのが大きな問題だったのです。ここが長岡藩ができた一番の理由だし、長岡藩が250年間維持できた理由です。新発田もそうですが、越後諸般というのは転封が少ないのです。新潟県の藩で転封があったのは村上藩と高田藩ぐらいで、信濃川に遠い所の藩が転封というか、移動になったわけです。信濃川近辺の藩はなるべく幕府も転封しなかったようです。なぜそういうことをしたかというのは、政治もからんでいると思うのですが不思議なところでもあります。

話を戻しますが、豊口先生が今「なぜ、長岡城はここにできたのか」という話をされましたが、当然、お分かりのように信濃川を支配するところが為政者が出たわけでありますから、そこに城を造るのが当たり前です。はっきり申し上げますと、山から里に城が下りてきたわけでありますから、里に下りてきたときに一番見渡せる、一番の戦略的な拠点として長岡ができてきた。長岡は、蔵王の堀直奇さんが8万石領主になって、長岡の平潟原の方にニュータウンを造ったという話がありますが、そういう一つの視点もありますが、長岡という所が戦略上新潟平野というか信濃川を、一番押さえつけられる場所だというふうに考えるから城ができたということです。

もう一つは、歴史をやっている方はお分かりだと思いますが、中世には日本海側には大きな港町はできないのです。これは当然、川を遡った何キロ先、世界の都市を見ていただくと分かるのですが、そういうふうにはできるわけですが、長岡はある意味では、堀さんは、大きな考え方ですけれども、大陸貿易を考えて長岡の街を造ったのではないかと、それが長岡のお城ではないかというところがあります。こんなことから考えますと、信濃川というところは、すごく文化の流入地帯でもあったのですが、もっと大きな人為的な恵みを持ってきたところだというふうに考えて、長岡の街ができたと思っています。

(豊 口): そうしますと、長岡城ができて、そこに川を利用した交易というのが生まれ育ったわけですね。大陸貿易が始まっていたかどうか分かりませんが、川を舟運で荷物を運んで来て、長岡で小舟に積み替えた。関所みたいなものですから、ここで税金を取った。ハンガリーのブダペスト、そういう所と同じなのです。そこで舟に荷物を載せ替えて税金を取るという、そういうことでお金がそこに残っていったという話を聞いています。柿川の港とか蔵王の港というのは、その当時どんなふうだったのですか。

(稲 川): すごく殷賑（いんしん）だったと思いますね。長岡の街には川で生活をする方たちがたくさんいました。今は信濃川の方に家が向いていませんし、柿川などは今、川を背にしていますが、昔は川を目の前にして前に道路があって、その向こうに川があったわけですから、川から上がってきた人たちが商売をしていたということです。

長岡で発掘などをやりますが、東山などをずっと歩いていくと、中国から来る須恵器というのがいっぱい出てくるのです。それは何かというと、室町期以前に大陸と交流があった。表日本が日本海だったわけですから、例えば両津に夷（えびす）という町があるように、外国人が渡ってきて住み着いて、そういう所が川をうまく利用したというのもありますし、それを関所にして、近世になるとそれを上手に関税として取り立てたのが為政者だと思っています。

新潟県は上杉謙信が出て、上杉謙信というのは失礼な言い方ですが、略奪経済の代表みたいなものですから、戦国時代で、どこかをやっつけて金を持って来たわけですね。ところが平和になったときにどうやったらいいかと思ったら、農村で米をあげるよりも川に関所を設けて関税を取った方が得ですから、そういうことを長岡藩の前期の人たちはやっていたのではないかと思います。

(豊 口): 我々は、歴史的に時系列で非常に混乱することが多いのですけれども、例えば佐渡に金が出たと。これを長岡藩が全部押さえ込んでいた。そういう歴史的な事実がありますね。それによってどういうふうにして長岡藩がお金を貯めたか分かりませんが、今の新潟は、全部長岡藩の領地として押さえ込んでいて、税関の建物も長岡のものだった。そういう川をふくめて非常に恵まれた状況に長岡藩というのは置かれていた。財政的に非常に豊かな環境の中に長岡藩がありながら、戊辰戦争の方へだんだん動いていくわけですが、お金があったからそう

なったのでしょうか。

(稲 川) : 長岡藩は7万4千石という石高を幕府がくれるのですが曖昧なんですね。ご承知のように7万4千石という知行目録を与えても、新田開発で勝手にしなさいという条項があるのです。ということは、信濃川は開拓する場所がいっぱいあったわけです。荒れ地があったわけで、谷地とか、そういうところは大いに開墾をやりなさいと、そういうふうに厚遇するんですね。なぜ厚遇したのかというのが問題なので、これは幕府にも長岡藩に対しての、何かこうアキレス腱みたいなものを持ってまして、牧野さんとか堀さんが来る時には特権を与えられる、この特権が公儀御証文とあって、信濃川の河川交通権を全部長岡藩の町役人に委託するんです。江戸時代というのは不思議な時代なのですが、お前さんたちに信濃川の河川交通権を全部与えますよと、それが長岡を殷賑させた一番の大きな原因です。それが今でもいろいろなトラブルを起こしているというか。

(豊 口) : 話に聞きますと、殿様は農民にはわらじも履かせなかったという話が残っているんですね。それぐらいひどかったというのですけれども、それはどうなのですか。

(稲 川) : 長岡藩に「昇平夜話」という資料がありますが、なかに百姓は殺さぬように生さぬようにという、政策をやったのですが、長岡藩の牧野さんというのは、ある意味では江戸時代の典型的な近世大名でありまして、近世大名というのは、農業生産を指導して、できるだけ消費をさせない。主要産業である米を生産させる。それはどこかという信濃川流域の荒れ地なんです。そこを開拓をする。そして実質14万石になったわけですが、これも面白いやり方で開拓をするわけです。割地制度という特殊な制度を使ってやるわけですが、新発田藩などとは違うところがありますね。新発田藩などと違って、長岡藩には豪農が出ないという特徴がありました。

(豊 口) : 金がとれて、石油がとれて、お米がとれたと。これは言うことないと思うんですね。

(稲 川) : 長岡は米はね。

(豊 口) : その当時はあまりとれなかったですか。

(稲 川) : いや、とれたのですが、あまりうまい米ではなかったみたいです。長岡米はそんなにうまくなかった。魚沼もうまくなかったみたいです。たしかに長岡では、当時、米は反収が少なかったのですが、苛斂誅求な課税をやりまして、栃尾などは今でもそれを恨んでいます、百年以上も前の話なので、これは勘弁していただきたいのですが、長岡の藩士は森立峠を越える時は水盃をしていったくらいですから、ほかの所もそうだったのですが、役人は厳しく米を取り立てたみたいですね。なぜそうなったかというのは、長岡藩の姿勢にあったのだと思います。

(豊 口) : そうしますと、長岡に新潟の方から船が入ってきますね。かなり大きな船だったのでしょけれども、ここで荷物を積んできて、ここで下ろす、どのぐらいの大きさの船で、何を積んできたのですか。

(稲 川) : 「こうりんぼう」とかそういう船なのですが、平船とかいいますが、米で100俵くらいは運べたといいますね。上がって来るときは船に綱をつけて引っ張って船を上げるわけです。大変だったみたいです。

(豊 口) : ここで大きい船から小さい船に替えるんですね。ここから上流に行くときには、やはり土手を引っ張って歩いた。

(稲 川) : そうです。

(豊 口) : そうするとそれだけの商いが行われると、長岡という街はかなりいろいろな人たちが住んでいただろうと思いますが。

(稲 川) : ご承知のように、運ぶときに人夫がいます。それに倉庫業をやります。それをする荷主とかが

たくさんいますから、そういう人たちはかなり潤いました。長岡の遊廓の一等地に行く人は、みんな船の関係者、二等地に行くのは庶民だということになっていました。

(豊 口) : 遊廓というのはどの辺にあったのですか。

(稲 川) : 長生橋の近くにあったんです。あの辺に行きますと、一等地、二等地というのがあって、よい遊廓と悪い遊廓がいっぱいあって、長岡商人の人たちでも普通の商人は二等の遊廓に行くんです。船の関係者は、一番いい遊廓とか遊び場所に行くんです。決まっていたようです。

(豊 口) : 遊廓に務めている人はどのぐらいいたのですか。

(稲 川) : 時代によって数が一定していませんが、遊廓が 35、6 軒あると 300 人以上の人が関係していたのではないのでしょうか。船主などは大散財して、長岡藩の侍がよだれを出しているみたいですから、相当の金持ちだったんじゃないでしょうか。塩一俵を運ぶのに長岡に落とした金が 1 両くらいと言われてます。1 両というと今で 4 万円くらいになるのですが実勢価格でいうと 10 万円くらいですね。塩というのは、今は大したことない金額ですけども、当時は貴重品ですから、1 年間に 1 万俵くらい上がってくるわけですから、すごいお金じゃないでしょうか。長岡藩の財政が 1 年間で 5 万両ですから、塩だけでもそれだけ儲かります。

(豊 口) : そうすると、船を引っ張る人たちというのがどういう身分の人たちなのか分かりませんが、ここまで上流から下りてきて、積んで、どこまで運んで行ったのですか。

(稲 川) : 一番遠い所は、善光寺平まで行ったんです。魚沼の六日町とか。江戸時代のはじめの頃は善光寺平まで行ったみたいです。当然、十日町とかにも行くわけです。

(豊 口) : どのぐらい時間がかかったのですか。

(稲 川) : 二日くらいはかかるんじゃないでしょうか、上って行くのに。船で下るのは簡単ですよ。下るのは、帆かけ船をそのまま乗っていけばいいわけですから。

(豊 口) : それは冬もあったのですか。

(稲 川) : そうです。冬も運びましたね。

(豊 口) : 大変な労働力。

(稲 川) : 沿岸部には一生懸命運んだ人足の足跡が石についていたという話ですからね。

(豊 口) : その当時、人足と言われる人は何人くらいいたんですか。

(稲 川) : 長岡には組があって、渡町組とか、上田町組とかあるのですが、組頭というのがいて、10 軒くらいで単位になっていたようです。少なくとも 200 人以上はいたのではないかと思います。その人たちが明治になってからみんなあぶれるんですよ。大変だったようです。

(豊 口) : そうすると大変な交易都市だったし商業都市であったということですね。

(稲 川) : 船乗り人足というのは、一つのプライドを持っていて、歌を歌って、それを再現できなくて申し訳ないですが、昭和 40 年代までまだ歌っていた人がいました。船に乗るときに「めでたい、めでたい」という吉祥の歌を歌うんです。柿川を下って行く時に大きな声で歌って行くのですが、上がってくる時にも歌うのですが、私は昭和 40 年代に聞いたことがあるのですが、もう全くそれが伝わっていません。要するに宝の船が上がってきたというんです。それは自分たちの恵みをくれる船だというんですよ。そして大体河口には柳が植えられていて、そこを上がってきますから、柳の木というのは悪魔を祓うということですから、昔は柳の木がずっと沿岸に並んでいるんです。風情があって、渡里町の辺りは昔の写真を見ると、どこかの浮世絵に出てくるような絵があります。

(豊 口) : 長岡は美しかったんですね。

(稲 川) : 美しい街ですよ。水と緑がいっぱいあって、小路には水路があって、戊辰戦争の前まではベニ

スようになっていたんじゃないでしょうか。今の柿川なんていうものじゃないですから、水はたくさんあったわけですから。信濃川の水も、今よりも水位は相当上がっていたようですし、倍ぐらいは水量があったようです。

(豊 口) : 船で運んできた荷物というのは、どこから来ていたんですか。

(稲 川) : 塩などは西海塩ですから、瀬戸内海の塩ですとか、但馬の石だとか、北海道の鯨などは江戸時代にはもう入ってきていますからね。猪股津南雄（いのまた・つなお）という俳人がいるのですが、その祖先は北海道に買い付けに行って、身欠き鯨とか、四十物というのですがそういうものを蝦夷の人から買い込んで持ってきていますから、それを大阪などに持って行って売のです。大阪に持って行って、大阪から銀を持ってきまして、長岡は金と銀の相場がありまして、商人は銀を買って侍は金を使いますから、そこで両替屋がはやって、また儲かるんです。

(豊 口) : 今、考えると想像ができないのですけれど。

(稲 川) : 昔は、船というのは最大の大量移動の運搬機ですから、馬に載せるよりも船に載せた方が良いわけです。北前船に載せて敦賀まで持っていけば関西に行くわけですし、米蔵が大阪の中島にあったのは長岡藩だけです。ほかの越後の藩はなかった。河井継之助が改革をしたのはそこなんです。長岡藩というのは大阪に行って直接米を売ることができる、そういうシステムを持っていたから、それを利用して改革をしたんです。産物を一番いい所へ大量に持っていけば儲かるわけです。そういう商人が信濃川を利用したんです。だから長岡の商人は、北側の新潟に向いている人と上州の方に向いている人が二種類いまして、大体北側の方に向いていたんです。今は新幹線の方に向いていますけれど、信濃川の方には向いてないです。

(豊 口) : 例えば、蔵王の港と柿川の港というのは、機能的に違ったのですか。

(稲 川) : 蔵王というのは大変な所で、蔵王領というのは上野の寛永寺領で、蔵王町と石内村、ちょうど柿川の出払いのところに蔵王という町があるのです。途中蔵王という長岡藩領でない町があるんです。これは長岡には目の上のたんこぶでございまして、あそこの方が今いたら大変問題なのですけれども、長岡の人といつも喧嘩ばかりしてしまっていて、あそこをうまく通らないと長岡に来ませんので、新川という川を安政年間に作って、渡町から直接信濃川に出るように作ってしまう。1,600両というお金だったと思いますが、それを町人が金を出して作った。その新川の川口で大砲を撃っていた人が、後に三尺玉を作ってどーんと撃つんです。今でも川の跡が残っていますが。たしかに信濃川というのは、たくさん交流はするんだけど、それを邪魔する人たちがいろいろ出てくるんです。蔵王の人たちも自分たちが運べば儲かるわけですから、船乗り人足になるわけです。そういう競争などをやってお金持ちになるんです。

(豊 口) : 長岡には船問屋はあったんですか。

(稲 川) : いっぱいありました。はじめ18軒、だんだん株が乱れてきまして、そのうちに何人にもなりますが長岡には問屋衆というのがあって、問屋衆が長岡船頭組合を仕切っていた。それが約108艘の船を信濃川に出しているのですが、だんだんそれが300艘くらいになったりして、また少なくなったりいろいろなんです。やはり船のプロデューサーがいなくなるとだめなんです。船は荷物を運んで産物を運べばいいというのですが、それをアクセスする真ん中に立つ人が上手にならなくなってくると、だんだん寂れてきて、それをまた誰かが建て直すようにして頑張ると、今度は蔵王の人と喧嘩をしたり、いろいろしていますが、商人、特に問屋衆さんは力がありました。

(豊 口) : その当時、川西というのはどうだったのですか。

(稲 川) : 大島に商人がいまして、大島新町という所は長岡の商業地帯の街が向こうにあって、特に上山

藩とか、向こうの産物を信濃川で交流します。

(豊 口) : それで長生橋がある。

(稲 川) : そうです。長生橋は向こうの人たちはこちらに渡りたいという希望ですね。

(豊 口) : 当時、長生橋というのは誰が造ったんですか。

(稲 川) : 広江椿在門という緑町の人ですが、椿在門さんという人が夢を掲げて明治9年に作るわけですが、面白いことに大島の方が架けないで、隣の岡村という町の人たちが架けるんです。これはいろいろな歴史のしがらみがあって、それもわざわざ昔の渡し場の所を作るわけですが、これはやはり東西の文化の架け橋になっていて、川西の人たちの川東に対する思い、夢みたいなものだと思うんです。

(豊 口) : 私が初めて長岡に来まして、ニュータウンに住まいを設けたと言ったら、「よくあんな人の住めない所に家を建てましたね」と言われたんですよ。そのときすごいショックを受けましてね、「人が住めない所に家を建ててどうして生活しているんですか」と言われたのですが、そのぐらい川西というのは何かいろいろ言われるような所なのですか。関原なんかは川西ですが。

(稲 川) : 川西は今でこそ素晴らしい町ですが、あそこは大変な、やはり川西の人たちがこちらの方に開拓に来て、今でも寺島とか中島の人たちは、ほとんど川西の人たちが開拓をした所なのです、川の向こうの人たちが。古正寺(こしょうじ)とかそういう古い地名が残っていますが、例えば蓮瀉という名前があるように、今、造形大学は宮関という名前があるように、昔は蓮瀉なんていう所は、蓮の田んぼがある所に行ってみれば分かるのですが、泥沼だったのです。だから今でも私たちのDNAの中には、川西というのは泥沼の所に家を建てているんじゃないかという感じがあって、そういうことをおっしゃるのではないのでしょうか。すごい所で、あんな所に住めないなと思ったので、そういうことをおっしゃっているのではないかと思うのですが、それを開拓しまして、今本当に素晴らしい住宅街になったわけです。

(豊 口) : 最初大学を造ったときの登記の番地が蓮瀉というのです。そうしたら先生の一人が「学長、番地を変えてもらってくれ」と言うんですよ。蓮瀉というのは、大学の番地としては何となく世間体が悪いというんですね。そのうち宮関に変わりましたからよかったですけれど。後でいろいろな人に聞いたら、あの辺は人も住めないような泥沼で、とにかく蓮だけはたしかに生えていたと。

(稲 川) : 今、蓮瀉は大地主の方がたくさんいまして、すごくいい所になっていますが、信濃川は昔と川の道が相当変わっているのです。そのたびに洪水があって、泉島とかねずみ島とか今でも地名が残っていますが、島がたくさんできていて、そこで耕作の権利だとか、川筋が3年に一度変わるわけですね。そうしますとそこで耕作地が変わるわけですから、村同志の喧嘩があるのです。そういう意味では暮らせない所だったのではないのでしょうか。ただの地形の問題だけではなくて、生きるか死ぬかの生存権の問題があったのではないのでしょうか。

(豊 口) : 長岡に来まして、大学の敷地を見たのです。千秋ヶ原という所はずっと、普通の土地になっているわけですが、昔、300艘くらいの船が入ってきたということになると、昔の土手というのは、千秋ヶ原の向こうにあったのでしょうか。

(稲 川) : 私その時生きていませんから、その辺は分かりませんが、地図を見ますと100間以上といますから200m以上、今の川幅は大体80mから100mくらいですが、一つの川が200mは川幅があった。それが縄状にたくさんあったといわれていますから、地図を見ると信濃川はもっと広がった。明治以前はそうだったのですが、江戸時代などはもっと広がったのではないのでしょうか。お分かりだと思いますが、康平、寛治の図なんていうのは偽物の図だというのは、西

暦 1100 年ごろは、東山から西山のはずれまで全部川だったという説もありますから、これは本当かどうか分かりませんが。

(豊 口) : それは本当だと思いますよ。

(稲 川) : 川つなぎの櫓というのが栖吉にありますから。

(豊 口) : 縄文土器、火焰土器と言われている土器、あれは信濃川の丘陵地にしか出ていないわけです。しかもあれは縄文時代の最後、末期のころにちょこっと出てきて、そしてすぐ姿を消した。だからそのころ相当の暴れ川で、どうにもならなかった状態のときに、住んでいる人たちが神に祈りを捧げるために、神と人とを結ぶ言葉として信濃川の荒れた状態を土器に形づくって祈ったのだらうと、私は思っているのです。そういう意味では、この信濃川の周辺の川は相当荒れていたのだらうと思うのです。今お話を伺って、とにかく非常に文化性の高い街であったと、しかも商業都市として非常に栄えていたということがよくわかりました。

私は長岡に来て初めて知ったわけですがけれども、長岡花火というのはお祭りではないと。あれは戦争中の 8 月 1 日に大空襲があつて、1,500 人近い方が亡くなられた。その霊を弔うために花火を打ち上げるのだと。だから曜日には関係なしに打ち上げている。亡くなった方に対する祈りの花火だと伺いまして、私は長岡花火の持っている意味に感動したのです。ところが後でいろいろ聞いてみると、もっと昔から花火はあつたのですね。

(稲 川) : そうですね。花火は長岡藩時代からありました。長岡は時刻を気にしてしまつて、常在戦場でしたから太鼓とか号砲とかというのがあつて、中川繁次さんという人は、代々中川家というのは花火を作って、昼の花火で正午の大砲を撃つ、それが生業だったのです。その人たちがたまに、先ほど話が出ましたが明治 11 年に大島屋のつるが、片貝の佐藤佐平次さんの親類に放蕩人がいたのですが、その方が遊廓に遊びに来て、その方に花火を上げてくれと、実は水子供養だと、自分たちの子供たちが遊廓で失っていく命を、是非供養してくれということで上げたのが長岡花火の一番の由来だと言っています。

それ以前にも時折花火を上げていて、例えば長岡藩の侍の人たちがのろしの稽古をすとか、そういった時に上げていたようですが、正確に 150 発以上上がったのは明治の初めごろ、それが弔いですね。これは片貝の花火に似ているところがあるのですが、天国にいる人たちに交信をすると、そういうのが花火の一番の由来のようです。

(豊 口) : そういう花火の歴史が長岡にあった。遊女たちが花火を自分たちの自前で上げていたという話があるのですが、その辺、詳しくお聞かせいただきたいのですが。

(稲 川) : 私、遊廓へ行ったことがないので分かりませんが、これは言い伝えて、嘉瀬さんがよく言っているのですが、花火師と遊廓の女性とそれからそれを最賃にする旦那さん、この三つがあつたから長岡の花火はうまくいったという話なのですが、こういうことなんです。

夏になると遊廓に来る人は少なくなる。それをどうにかたくさん来るようにという、商業振興というのでしょうか、そういうのが発想みたいですね、本当は慰霊のためですがけれども、花火というのはスポンサーが必要なので、スポンサーを遊廓の方たちが、本当は遊廓の楼主がやればいいですが、女性たちにやらせたみたいです。「お前さんたち、花火を上げるから最賃の旦那に金をもらってこい」と言って始めたいです。ところが遊廓の人たちもまたそれが上手で、嘉瀬さんなどに言わせると、1 発上げるのにあの人からも金をもらってきて、この人からも金もらってきて、10 発上げますと言うけれど、1 発のためにたくさんから金をもらったようです。上げれば分かりませんので、バーンと上がっていれば「あんたの花火だよ」と言えばそれで終わりですから、その間の 9 割くらいは自分の懐へ入れたようです。上手にやってみたい

です。上手にやった人が夏太ったと、遊廓の遊女が夏になると太るのはそうだと、本当はやせるはずなんです、あれは花火のせいだと言われたそうです。花火で儲かったのだと。

(豊 口): 嘉瀬さんは、私は花火の神様と思っている。長岡花火の伝統と技術を作り上げた。嘉瀬さんがシベリアに抑留されたときにたくさんの戦友を亡くした。日本へ帰ってこられた後に、自由に行けるようになってからシベリアに行かれて、戦友を吊って白い花火を上げた。日本に帰ろうと思ったら、亡くなった戦友たちが「嘉瀬、お前もう日本に帰るのか」という、後ろ髪を引かれたというお話をされていましたが、その辺になると、私は花火文化というか、すごいことだと思うのです。

(稲 川): 私も長岡の花火を昔から見ていますが、長岡の花火は菊型の花火が多いのです。牡丹型の花火が少ないのです。なぜそうかと、嘉瀬さんに聞いたことがあるのです。嘉瀬さんがシベリアのアムール川で上げた白い花火というのを写真で見せてもらったのですが、それはものすごく尾を引く花火。花火というのは、ご承知のようにパッと散ってパッとなくなるというのが男気なので、それが花火の美しさだと言われています。ところが長岡の花火というのは、何か尾を引くのです。それは嘉瀬さんに聞いたら「そうじゃない、1秒でも多く何秒でも夜空に咲かせるのが、我々長岡の花火の特徴だ」と、それは鎮魂を込めていて尾を引くんだと言われました、だから長岡の花火を見ていると、菊型か柳型、菊というのはパッと散って長く菊野花卉のようになるんですね。牡丹というのはパッと散っておしまいなのですが、牡丹型よりも菊型が多かったというのは、やはり、今でも仏様の前にもっていく花は牡丹よりは菊を持っていきます。それでそうなっているのかなと思ったことがあります。

(豊 口): 長岡の花火で一番きれいだなと思うのは、白なんです。東京ですとああいう白い花火というのはまず上がりませんし、隅田川に行ったら小さいのがポンポコ上がっているだけです。長岡に来て初めて尺玉、スターマインというのですか、あのすごい花火が連発で上がっていく。それが非常にきれいな、透き通るような白で上がっていくでしょう。あれは素晴らしいと思うんです。

私は鎌倉に住んでいますけれども、鎌倉の海岸でも実は花火をやるんです。だけど、これが何か線香花火のような感じがしまして、どうも見ていてもつまらない。ところが長岡に来て花火を見ると、これが本当の花火なのかなという感動を受けました。やはりその技術を作ってきた長岡の花火師の人たちというのはすごいと思うのですけれども、嘉瀬さんというのは、何代かやっていたらっしゃるのですか。

(稲 川): そうらしいですね。これは公開の場でバラすと怒られるかもしれませんが、昔の新組とか今の黒条とか、長岡には花火師が何人もいたのですが、花火師に聞いたことが幾つかあります、これは嘉瀬さんにも聞いたのですがこういうことを言っていますね。なぜ長岡の花火をきれいにしたかという、一つはこういう理由があって、昔は江戸時代のころの花火は黄色と白しかなかった。ところがマグネシウムとかそういうものを入れたのは、先ほども言いましたが遊女の方たちが花火を上げるわけですが、自分たちはスポンサーにきれいな花火を上げてくれなければ金をくれないと言われるわけですから、彼女たちが花火師に向かって、きれいな花火を私に持ってこいという命令をしたようです。したがって花火師の人たちは一生懸命科学薬品を使って、当時、長岡は織物業が盛んだったのです。織物業というのはいかによ衣着物を作るか、きめの細かさが大切なのですが、織物の目が細かい方が縮になるわけですね。ところがそのほかに色がきれいだというのが大切なのです。そうしたときに化学染料を使うんですね。明治 11 年に花火を上げるわけですが、長岡の花火師の人たちは、いこく屋とか染物屋さんに行って、

化学染料、化学の薬品をもらってくるのです。それを花火の中に入れる、それが早くから、特に色鮮やかな花火は得意になったんです。長岡が一番最初に赤い花火をあげたのではないでしょう。当時、ほかの地の花火というのは色が付いていない花火なのですが、色付きの花火をしたから長岡の花火が有名になったのです。

今はもう当たり前になっていますが、あの当時化学薬品を使える化学技術者をうまく連れてきて、それを爆発させないようにして作っていくというのは、花火師もたまには遊廓に行きたいでしょうし、遊廓に行くときにここにこしてもらって頭をなでられるわけですから、一所懸命頑張ったようです。そうすると奥さん方は、今回も花火を作ったと言って怒って、だから花火師の奥さんは花火を見に来ないと、そういうことを言っていました。長岡の文化がそうなのですが、人間が人間と摩擦を起こしながら何かを作っていた。

(豊 口) : そうすると、長岡の花火というのは庶民の花火である。殿様はどうしていたのですか。

(稲 川) : 殿様はあまり見ていなかったです。殿様は狼煙 (のろし) を見ていたり、砲術訓練には来ていました。この前、牧野さんが来たときに片貝の花火を見に行きたいと言ったので、殿様は行かない方がいいですよと言ったのですが、それでも行くと言っていました。やはりきれいな方がいいみたいですね。

(豊 口) : そうすると武士も花火は。

(稲 川) : 武士は元々狼煙ですから、花火は通信伝達機関ですから、どういう花火が上がったということで、攻めろとか、そういうことをするわけですから、暗号みたいなものですから。武士は花火は大切です。昔は昼間の花火の方を武士はいっぱい使っていて、昼間の方が花火が上がっていたんです。夜の花火というのは少なかった：ですね。

(豊 口) : 長岡では舟運によっていろいろな交易が行われた。花火の技術も非常に伝統的で長いものがある。

(稲 川) : 周辺で船が出るときにも花火が上がっていましたから。

(豊 口) : この花火の技術というのは、どこかに輸出されたのですか。

(稲 川) : いえ、あまり聞きません。私は長岡の花火の名の独特の呼称は長岡しかないんです。例えば諏訪に行っても天竜に行っても、長岡の花火の呼称というのは長岡しかないですから、あまり伝達していないんじゃないでしょうか。今、独自の呼び方がすたれています。「昇り曲導付」なんていうと、長岡でしか通じない言葉です。よく「曲導」というのはありますけれども、「曲導付」とかいうとんでもないような言葉は長岡しかないです。だから、長岡の花火は独特に作っていたんじゃないかと思います。

(豊 口) : たしかに戦後あちこちで随分花火大会が行われていますよね。大曲でやっている競技花火とか。あれは花火師の競技大会でいろいろな花火を上げているのでしょう。大曲の雄物川ですけれども、そんなに大きな川じゃないんですよ。私はあそこにいたことがあるから分かるのですけれども。ところが長岡の信濃川の川幅というのは、三尺玉を上げてても問題がないほど広い。街の中で花火を上げる環境としては世界一ではないかと思えますね。

(稲 川) : 花火論議になってしまって、信濃川の話でなくなりましたが。

(豊 口) : ですから長岡の信濃川というのは、花火を打ち上げるのに一番適しているという、そこに昔は舟運があって文化が栄えた。そういう意味では、信濃川と今住んでいる長岡の人たちとのふれあいというのが、どうもうまくいっていないなという気がするのです。川を愛するためにはどういう行動をとったらいいのかというのが一つありますよね。ところが、子供が信濃川で遊んでいる姿を、12年間で一人も見ることがない。釣りをしている人も、後で聞いたらいるよと言

われたのですけれど、実は 12 年間、お一人にも会っていない。自分で釣りに行こうと思って釣り道具屋さんを探したのですけれども、あるらしいのですけれども見当たらなかった。どうも川から離れて生活をしているような気がするのです。

(稲 川) : 我々子供のころは落下傘というのを拾いに行ったんです。中洲まで泳いでいきまして、花火のかけらがたくさん落ちていて、それをもう 1 回上げたり、おっかないことしましたね。長岡の花火は吊り花火といいまして、空中に漂うんですよ、落下傘で、あれは印象的だったです。水中花火というのがありまして、水に、半月みたいに上がってくるのですが、昔は、そういう花火が川と一緒に楽しむ花火だったのですが、今はやはり観客のためを思って、大きな花火しか上がりませんが。

(豊 口) : 長岡藩が栄えたというのは分かるのですが、戊辰戦争のときに、川はどんな機能を果たしたのですか。

(稲 川) : 私は戦争史をやっていますが、当時の人は川をほとんど泳げないのです。侍が川に落ちて死んだ話がいっぱいあるのですが、大体この辺ぐらいでみんな溺れるんです。水練にはいろいろな流派がありますが、庶民はどうも水練というのをやっていなかったようで、信濃川というのは猛烈な障壁なんです。長岡藩も信濃川の向こう側に渡るのは、機会がなければ渡らないということをやっています。戦争の時に大島の方から長岡に渡るのですが、渡れないのです。船がなければ渡れないということになっていて、今だと泳いで鉄砲でも持って行ってさっと撃てば奇襲戦ができるわけですが、やはり船がないと渡れない。長岡藩が川東の方に全部船を回収しましたから渡れない。したがって西軍の人たちは与板から船を引っ張ってきて奇襲戦をするんです。与板というのは実は勤皇藩で、長岡藩と敵対関係にありますから、与板藩は提供するんです。それを持ってきまして大島から渡って、そして長岡を攻めて長岡城が落城するんです。につき与板なんて言うと怒られますが、与板は長岡城を落城しましたので。それでも市町村合併をして仲良くしたいと思っていますから。余計な話ですけど。

(豊 口) : そうすると信濃川の中流、長岡を中心とした所と下流とは、基本的にいろいろトラブルがあったわけですね。

(稲 川) : 川をめぐるトラブルというのはすごいです。今でも小千谷と仲が悪いというのは、川舟、舟の問題とか水の問題。

(豊 口) : 仲が悪いんですか。

(稲 川) : よく分かりませんが、小千谷が市町村合併に来ないのはおかしいなと思っているんですが、何か、小千谷と長岡の川舟の競争というのはすごかったんです。小千谷というのは縮ですごく金儲けしているでしょう。それを直接信濃川を通して京都、大阪に持って行けば売れるわけです。ところが長岡藩が目の前にいるわけです。ここをいかに通過するかというのが、小千谷商人の一番の大きな問題だったですからね。舟を運んで北前船で新潟港から出航すればいいわけですから、川蒸気でも大喧嘩をしていますね。安進丸とかいう川蒸気が上ってくるのですが、長岡から小千谷までどう通すか。三島億二郎が東京から長岡に帰ってくる時にも、長岡商人が早く帰りたいのに、小千谷で船留めというのがあるんですよ。小千谷でわざと船留めをするんですよ、小千谷商人は。そして自分たちはここで泊まります、船は終わりです。あとは長岡まで勝手に歩くと、大喧嘩になるんです、すごい大喧嘩ですね。これが今でもしこりが残っていると残っているかもしれませんが、昔は船の渡船権とか、船をいかに出すかというのは死活問題ですから、物語がいっぱいあります。

(豊 口) : 何か特別面白い話がありますか。

- (稲 川) : ありますよ。新潟と長岡の川蒸気を明治6年か7年に通すのですが、この時に資本をどういふふうにもつか。船会社のセッポンをどういふふうにもつかというときに、新潟商人の鈴木長蔵とか大変な裕福者がいるのですが、その人たちが長岡を通した方がいいと、その時に長岡の商人ですぐに飛びつく人とすぐに飛びつかない人というんですよ。それがまた、後に小千谷の商人と別々につながって、長岡は対抗人脈がたくさんできまして、それで摩擦をしながら発展していくんですね、これは水をめぐり問題ですね。
- (豊 口) : そうしますと、上流の小千谷も含めて、長岡にはすでに繊維産業というのがあったのですか。
- (稲 川) : ありました。長岡も繊維産業があるし、栃尾とか見附とか、織物というのは当時としては、新潟県というのは米の生産がなくなったら冬に何をするかという織物なのです。織物を織って売っていく。したがって生産をしても商人がいて船で流通しないと生活ができないのです。したがって船乗りというのはすごく利ざやを稼ぐんです。だからよい物を作って行くわけです。十日町の明石縮などは長岡の商人が織らせるんです。それは西陣から着物を持って、それは長岡商人の小林伝作というのが夫婦で京都旅行をするんです。京都旅行をして、羽織と着物を買ってきてそれを裂いて、それを十日町に持って行って織らせる。そうすると西陣よりもいいものが織れる。新潟県人というのはものすごくまめでしょう、そして手先がすごく器用だから織らせるんです。そういう面では、織り姫というのがたくさん出て、ちょうど信濃川流域で産業が発達する。
- (豊 口) : なるほど。そうすると夏の間は米を作り、冬は織物を織る。
- (稲 川) : 織物を作って、それを信濃川で流し、さらしたんです。また塩とか、塗り物とか、そういう文化が入ってくるんです。塗り物というのはお碗とか、この辺で作れないものを上げてくるわけです。石とか材木とか、そういうものも上げてきます。
- (豊 口) : 何となく分かってきたのですけれども、これだけの川があって交易をしてきたわけですが、器文化というのはないですね。今おっしゃった漆器にしても、普通、食文化が発達している所、特にこれだけの川があれば、川魚とかそういうのは多分いっぱいあったと思うのですが、そういう食べ物を食べるための器文化が長岡にはない。周辺にもあまりないですね。これが不思議でしょうがないわけです。
- (稲 川) : そうですね。会津は阿賀野川で器文化が上がっているんですよ。器文化がないというのは、ないのではなくて、今、私ども被災資料で蔵なんかを見ますと、昔のお膳というのが今の蔵の中にいっぱい入っていたんです。漆器がすごくありまして、長岡でも漆器文化、例えば岸屋さんとか、ずっとやっていてこのたびだめになったのですが、塗り物はすごく多くて、お碗の文化もないわけではなかったのです。これはたまたま長岡の人たちは合理的に、明治から考えて瀬戸物に走ったのです。瀬戸物屋というのが、明治前まではお碗だった。ところが瀬戸物が来て、瀬戸物というのは当時すごく儲かったんですね。この辺は土がよくなかったので、結局瀬戸物は高かった。ところが信濃川の河川交通で明治になってから大量に上がってくるようになった。そうしましたら瀬戸物屋が儲かったので、それでお碗がだんだんすたれていった。
- (豊 口) : 地場産業としてはなかった。
- (稲 川) : いや、地場産業としてもありましたね。お碗を作っている所はたくさんありました。残念ながら村上とか高田のように残らなかっただけです。長岡は近代的で、瀬戸物というのはいいんです。あれはデザインがどんどん変わる、どんどん捨てればいわけですから回転率が高い、壊れるしね。したがって商人は儲かるわけです。お碗は儲からない、落としても割れませんから。
- (豊 口) : 消費経済が既に発達していたということですか。

(稲 川) : 長岡の人は上手だったですよ。目先が利くというか。造形大学の理事長さんに言うわけじゃないんですが、長岡はデザインさえうまくやればどんどん儲かった。

(豊 口) : うまくやってないかな。

(稲 川) : 今、やればいいんじゃないですか。

(豊 口) : いろいろ面白いお話を伺いました。長岡の近代への歴史が、何となくうっすらと分かってきたのですが、新しく明治に入って、長岡から傑出した逸材が随分出ていますね。そういう人たちの話を聞くと、なるほど長岡商人というのか長岡文化人というのか、そういう人たちがものすごい知恵を日本全国に提供している。その辺の人材が出てきた理由と、米百俵の問題があるわけですけども、その辺の関係は、もしお分かりでしたら。

(稲 川) : 昔、綱淵謙錠さんという作家が生きていた時に、東京で会ったときに同じような質問があったのです。「長岡に立派な人間が出るけれどもどういう理由だ」と聞かれたことがあった。それは信濃川があったからだと言ったんです。それはどういうことかという、当時、新潟町というのが北前船で大変栄えていて、吉田松陰なんかもわざわざ新潟まで来た。新潟の町には知識だとかそういうものがたくさん流れてきたらしいんです。長岡はその新潟を支配していた。したがって長岡の人たちは、新潟町からかなりの知的知識をもらっていた。いま我々は東京の方ばかり見ているので分かりませんが、当時は、新潟と長岡の距離が微妙な位置になっていて、そこから素晴らしい知識をもらったのではないかということ、綱淵謙錠さんと話をしたことがあります。

いずれ長岡藩の藩学の姿勢とか、例えば牧野さんの常在戦場の精神とか、そういうのもありますが、やはり今でもそうですが伝達機関がない、大量に何か入って来なければだめだと。例えば書物なども、商人がどうしても三国峠を越えて六日町で乗り換えをします。侍は三国街道を歩いて行きます。商人を見ますと、大体六日町で船に乗り換える。船に乗り換えるときに、何か書物を持ったりして、それを長岡城下に行くのと売れるというので、三国峠を越えさえすれば川船があるというふうに考えた、これがやはり人間を育てる一番の原因ではないでしょうか。

今、在郷（田舎）に行くと蔵を見ると、江戸時代の本がたくさん出てきます。京都、大阪の出版の本がたくさん出てきて、なんで農民がこんな本を読むのか、四書五経のほかに赤穂浪士とか、講談ものまでみんなあるのです。それを見るとこれはどうしてそうなのだろうと思うと、やはりそういう農民が読めるだけの、写本ではなくて刷り物なのですが、それは誰かが運んだんだと。やはり大量に運ぶ組織があったと。これはやはり信濃川だと思っているのです。

(豊 口) : それやはり一般の人々に受け入れられたと。

(稲 川) : そうです。長岡は河井継之助とか、明治になってから立派な人が出た。その素地になるものが、祖先の努力です。父母の教養とかいろいろあってはじめて傑出した人物が出るわけで、それは歴史だと思うんですね。歴史が堆積していると思うのです。その堆積は、長岡は晴耕雨読だとか、冬、灯火の中で本を読むとか、静かな時間がたくさんあった。その時間でいかに教養の勉強ができるかというのがあって、大量の本が入ってきた。大量の本はやはり船でないと、馬の背では量は少ないと思うのです。

(豊 口) : 信濃川というのはそういう文化まで全部運んできたということですね。その運ばれてきた文化とかそういうものを市民は全部受け入れた。

(稲 川) : 明治になってくると例えば表町小学校では就学率が44%、ものすごい率で、男子は66%で女性が22%でしたか、すごい率で勉強をしているのです。小学校ができたときに、庶民がそれだけの勉強にすぐ乗ってきたというのは、やはり読み書き算盤だとかそういうものが大切だとい

う話が、町で伝わっていたと思うのです。それは大量な文化的なものの輸送手段が長岡にあったから、その土壌になるものがあつたと思っていますね。

(豊 口): 長岡でそういう歴史的な教育、教養の考え方が市民の中にあつた。それが明治になって逸材を生んでいったというふうに、単純に考えていいということですか。

(稲 川): 活字文化です。だから神田の古本屋街に長岡人がいっぱい行って本屋を経営するとか、印刷屋をやるとか、新聞社をやろうとかというのは、そういうところから出てきたと思います。

(豊 口): 新聞社の話というのは非常に面白いと思うのですけれども、長岡で新聞社を作った。

(稲 川): そうです。長岡商人の人たちが大同団結をして北越新聞というのを作るんです。ところが喧嘩をしてまた別れたりするのですが、新聞社はどうしてもイデオロギーというか政治色が強くなりますから、仲間が喧嘩して別れたりするのですが、戦前は越佐新報と北越新報と長岡日報は喧嘩ばかりしていました。面白い新聞社だったものを統一したのが新潟日報ですからね。

活字を読むとか電話の普及率とか、そういうものを考えると、長岡は電話の普及率は全国で第2位だったわけでしょう、通信文化とかそういうものは早くから仕入れることができれば、たくさんのお金になったということが分かりますから、そういうものを長岡人はよく知っていたのではないのでしょうか。そういうことは、信濃川がなかったらそれはできなかつた。普通の川ではなかつた、大河だつた。大河はかなり大きな情報の押し出しがあつた。これが信濃川の特徴で、長岡の一つの歴史的シンボルだと思っています。

(豊 口): 新潟から長岡まで船が入って来れたというのは大変なことですね。

(稲 川): 明治になると有名な外輪船が入ってくるわけですから、川蒸気とって。だから少なくとも水深が2 m以上ないと入って来れませんから。

(豊 口): それに荷物を満載して。

(稲 川): ハイカラなこうもり傘をさして、から傘をさすと格好悪いですから、西洋傘をさして、ハイカラな着物を着て入ってくるわけですから、明治時代は川船が入ってきますと、みんなが見に行つたんですよ。そしてどういう人が降りてくるか、みんなで見とね。

(豊 口): 柿川の港などに行つたんですね。

(稲 川): そうです、みんな見に行つたんですね。だから船が入ってくることを市民が見て、市民が見たことによって触発されて何かをしたい、自分は船に乗ってどこかに行きたい、東京に出会い、どこどこへ出たいという話になるんですね。

(豊 口): それにしては、今、市民は信濃川に冷たいですね。

(稲 川): 信濃川はおっかない、魔の川だというイメージじゃないですか。

(豊 口): 子供に聞きますと、いい子は川で遊ばないと先生に言われたと言つて行かないんですね。

(稲 川): 昔、信濃川は「しなん川」と言つて、あそこに行くと龍がいる、龍がいて龍の中に入れられるともうそれは帰つてこないのだという話で、我々子供のころは信濃川で泳いでいますと、腰から下は冷たいですよ。引きずりこまれるわけですから、おっかなかつたですね。だから長生橋の前名は臥龍橋だし、蔵王橋の前名は金龍橋ですし、みんなドラゴンが入っているんです。ドラゴンを征服するのが橋を架ける一番の大きな目的です。魔物を退治するんだと、そこに木の橋を架けるのだというのが向こうの人たちの思いで。

(豊 口): だんだん分かつてきました。龍ですよ、水ですよ。

(稲 川): この辺は九頭龍神社とか、龍にかかわる神社が案外多いのです。

(豊 口): 例えば、龍が暴れると大洪水になりますよね。大洪水の時に例えば上流の方から背に木をのせながら水が流れてくる。ヤマタノオロチというのが洪水ですけれども、ああいう事故というの

は相当あったんでしょうね。

(稲 川) : あったんでしょうね。ヤマタノオロチ伝説はこの伝説ですから。龍が出るというのは、洪水などは神様の仕業だというふうに見たんでしょう。その龍を克服するというのが、長岡藩の治世だったと。例えば、九代様は龍徳院様といって龍に因む。河井継之助も蒼龍窟、小林虎三郎も双松で龍、長岡で偉くなった人はみんな龍と言っているんです。河井継之助は寅年生まれの寅の日に寅の時刻に生まれた寅だと言っているのですが、自分は虎よりも龍になりたいといって蒼龍窟という名前を付けたのです。やはり龍を押さえるというのが、侍の一番の希望みたいだったですね。

(豊 口) : 縄文時代の最後に火焰土器と称する土器が出ているのですけれども、あれは私はどう考えても暴れ川の水紋だとか、強風にあおられている水面の波がトサカみたいになっているという形にしか見えないんですよ。それを神に捧げる祈りの言葉としてその土地の人が作ったという、そういうふうにはかどうしても見えない。今、お話を伺って、龍だというお話があったときに、たしかにそれが裏付けされたような気がするのです。

(稲 川) : やはり、川の民なんです。我々は今、山に向かって礼拝していますが、山は気高くて神がいると。我々の長岡は、火焰土器の回っている所は、おそらく川に神がいると思ったんでしょう。川の民がこの流域にいて、流域の人たちが火焰土器を作ったんです。私はそう思っていますね。

(豊 口) : 私もそう思っています。だから神に捧げる言葉ですよ。

(稲 川) : 川に捧げる土器だったんですよ。そういう考え方をすると、火焰土器が火焰じゃなくなってくるんですよ。

(豊 口) : 水紋土器です、信濃川土器とかね。

(稲 川) : 小林達雄さんに怒られそうですね。

(豊 口) : いや、あの先生は怒らないですよ。私が言ったら黙っていましたから。だからおそらく、近い将来教科書もそういうふうに変わるんじゃないですか。これは長岡から発信しないとだめですけどね。

(稲 川) : 相当歴史が変わりますね。

(豊 口) : と思うのです。大分話がはずんでまいりましたけれども、この辺で、会場から何かご質問がありましたらお受けしたいと思うのですが、何でも結構ですがいかがですか。

(会場) : 三つほどあるのですが、時間の関係で回答が無理ならば一つでも結構ですが、まず、柳というのが「悪魔の木」とかいうふうにおっしゃったように聞こえたのですけれども、そこを聞き漏らしがなので、そこをもう一度お願いします。それから、百俵の「こうりんぼう」が来ていると、それを人夫がひいたとおっしゃるのですけれども、何人くらいでひいたのでしょうかというのと、それから川幅が100m、片一方でひくと、船は進路が変わりますよね。両方からひかないと上の方には行かないという気がしていたのですが、100mもあれば無理ですよ、その辺のことと、それから100俵の「こうりんぼう」が善光寺平まで行くわけないですから、どこかで変わると思うのですが、その辺がどれぐらいになって、さらに100俵からどれぐらいの規模の船に変わっているか、以上3点お願いします。

(稲 川) : 柳の木は悪魔払いの木だと言われて、例えば港とか入口に昔は植えたんですね。お分かりのように柳の格好が人形(ひとがた)になっているようで、どうしても港とか街道の入口に柳の木を植えて悪魔が入ってこないようにというのが、この辺の伝説です。柳の木は遣い物になりませんが、そういう言い伝えなんですね。

「こうりんぼう」は引っ張ってきますが、川幅が200mもありますから、前の舳先のとかに

幾つかの曳き綱を入れて舵取りをしながら二、三十人で引っ張ってきた。これは長岡の水島爾保布という人が「長生橋の図」というのを描いていますが、多い所で20人ぐらいでしたので、大体10人ぐらいで引っ張ってきたと言っておりますが、これは水の上ですからそう抵抗がない。多い時で20人ぐらいで少ない時は10人ぐらいで、女性が腰巻きをからげたり、男性がふんどしをからげて引っ張ってくるんです。格好いいんですね。女性は割烹前掛けつけて引っ張ったといいますね。

(豊 口) : 女性も引っ張ったのですか。

(稲 川) : 女性は上半身裸だったということもありますが、それを見物に行ったという人もいたようです。それから善光寺平までは、当然「こうりんぼう」は行けませんから、胴高船に変えます。胴高船というのは底の浅い船だったのですが、100俵も200俵も積みませんので、長岡の内川に入って積み替えをする。今は柿川ですが昔は内川というのですが、そこで必ず積み替えをする。川口の辺りは大変だったみたいです。引っ張って行くわけですが、川が分かれているわけですから、こっち側で引っ張ったら向こう側へ渡らなければならないわけですから大変だったわけです。そういう意味では、善光寺平まではだんだん浅瀬になってきて、明治の頃はもう行っていません。

(豊 口) : すごく現実的な話なのですが、引っ張った人の賃金というのはどれぐらいだったのですか。

(稲 川) : 「大橋佐平伝」を書いたときに、渡町組とか山本組という人たちが集まって内川のところで酒を飲むのですが、その人たちがどれだけの金をもらったかというのは、1日700文くらいもらっているのです。700文というともものすごいお金ですよ。そば一杯が16文ですから、ラーメン一杯が16文と20文くらいですから500円くらいだとすると、その何倍でしょうか、すごいお金です。船が信濃川を上下するのを通船というのです。信濃川を横断するのを渡船といいます。そういうふうに分けているんですね。

渡船業をやっている人と、通船業をやっている人は全然生業（なりわい）が違ってまして、信濃川の川幅を渡る人たちと、船に乗って新潟へ行ったり善光寺へ行ったりする人というのは全然違うんです。船乗り人足の方が金がいっぱい入るらしくて、それになりたがるわけです。人足の人たちというのは船に乗れないのです。ただ引っ張るだけなんです。引っ張って帰ってきて、また引っ張ると、それを何回も何回も繰り返すのですが、その人たちはすごい金もらったと、冬などはすごい金もらったといいます。星貴さんに言わせると、女性がいて悪いですが、寒くてちぢこまってしまって、遊廓に行ってもだめだったという人がいますね。遊廓に行っても遊ぶんです、彼らはひどい仕事をしているから遊廓に行くんですね、それで体を持ち崩して早く死ぬんです。

(豊 口) : 短命だったわけですか。

(稲 川) : 短命でしたね。川船をやった人たちは、すごく短命だったと思います。石切り人夫がそうですね。長岡にさえ来れば川船で稼げるという人たちが来るわけですから、その人たちは故郷を捨てて来るわけですよ。だからものすごく刹那的な生活をするんです。長岡の商家の半分は大体借家なんです。長岡城下の商人の町というのはほとんど借家で、自分の持家というのは少ないです。その人たちは全部、栃尾とか見附とか遠い所から集まってきて、それは農村で食えないから長岡の町へ来て川船人足になったりするわけです。その人たちは一生懸命働くわけですが、自分たちに残すものがないから全部使ってしまうんですね、それが短命の原因です。だから、そういうのを考えると長岡に来る輸入人口の人たちのことを考えると切なくなります。

ところが明治になって、そういう地域から集まってきた人たちが、長岡に石油とか近代産業

でつながるような、将来がつながるような産業が起こると定着するんです。したがって小千谷からとか栃尾からとか、与板とか見附とか三島とか、そういう人たちが集まってきて、長岡の工場街を作ったり、それを今度は石油を信濃川で新潟に持っていったり、機械産業や製紙を作って産業を興したりして、信濃川をうまく使って長岡の街が発展するんです。したがって、江戸時代は人間がいなくなっていく時代だったのですが、奥さんになる女性もいなくて働くだけ働いて死んでいった人たちがいたのですが、それが奥さんになる女性が入ってきて長岡の街を作っていく。長岡の街の人口が爆発的に増えてくるんです。明治時代以前は、長岡城下でいくら増えても1万8,000人以上増えないのです。ところが明治になって戊辰戦争に負けて人間が減るかと思ったら、どんどん増えていく。明治5年には2万人になっているわけでしょう。明治10年には2万5,000人になっているわけです。明治22年にはもう3万人を超えているわけです。そういう意味では、川というのは過酷な悲しい物語と、使い方によっては産業の街になっていったということです。

(豊 口) : 信濃川の果たした役割というのは本当に素晴らしいと思うのです。最初にお話をしたように、地球上の水の問題が今とやかく言われている。長岡に来て水道の栓をひねって水を飲んだら、実においしい。横浜の水は昔からいいと言われているのでけれども、今はもうだめになりました。それほど素晴らしい水が山から下ってきている。これは雪のめぐみだろうと思うのですが、そういう素晴らしい生活、水の世界に住んでいる長岡、これはもっと人々にアピールしてもいいのではないかという気がします。

長岡に来たときに雪は雪害だということで、決してプラスのものではないという話を随分聞かされたのですが、しかし、雪の降る所というのは、地球上で考えれば非常に文化が発達し、文明地帯になっている所が多いわけですよ。そういう文化が発達している地域の中に長岡が入っている。四季のメリハリがはっきりしていますし、信濃川の水も、これは絶えることはないと思うのです。そういう恵まれた環境の中で長岡市民が、かつてはこの地域は交流と経済の中心地であったということを考えれば、もっと長岡そのものが、信濃川を活用しながら新しい時代を迎えていいような気がして仕方がないのですが。

(稲 川) : 長岡の人たちは、大河信濃川に常にあこがれを持っているんですよ。長岡の水は実は雪解け水もあるのですが、雪解け水は一時的ですよ。長岡の地下水というのは鉄分が多くて飲めないのです。今でも地下水が出ますと道路が真っ赤になってしまいます。だから飲み水には適していないのです。したがって長岡の人たちは信濃川の水を飲みたがる。したがっていかに信濃川の水を引っ張ってくるか、用水を引っ張ってくるか、それが歴史の課題なのです。大正15年の上水道も信濃川の水にさえすればいい水が飲めるということです。これは本当に今恩恵がありすぎて、過去の人たちから見れば贅沢な話だなと言っています。

(豊 口) : 四国や九州に行けば、大阪などもそうですけれども、とにかく水がなくなることがよくあるのです。貯水池が干上がって、節水をしなければいけない。雨は降らないという、非常に精神的に負担を感じることがよく起こるのですけれども、長岡では絶対そんなことは起きませんでしょう。だから私も長岡に来てそういう心配をしたことはない。何ということか恵まれすぎているのでしょうか。

(稲 川) : 私は大正15年の都市計画が間違っていたと思いますね。例えば萩だとかほかの街に行きますと、用水が、池があつていいねと、長岡は当たり前だと。長岡はすべて道路の脇に全部水が流れていまして、ちゃんと下水も用水もよくなって、侍屋敷の脇にはちゃんと用水が通っていたわけですから、それを全くなくしてしまっただけで道路になってしまった。ベニスのようにたくさん

の用水が通っていたわけです。昭和通りは川が流れていたし、たくさんの掘割があったわけですが、そういうほかの、例えば新潟がそうだったといいますが、長岡だってそういうところがあって、水を引き込んでいました。お城の堀の水は、今の柿川の水を入れて満々と湛えていたと。昔の長岡城の堀は青みがかかったすばらしいというふうにっています。

(豊 口):今は意外に川に対して冷たいんじゃないですか。蔵王の城跡などに行くと、ひどいですねあれ。

(稲 川):そうですね。

(豊 口):ボウフラがわきっぱなしという感じになっていますね。

(稲 川):長岡の信濃川には砂利取り船というのがあったのですが、川底を相当削りまして、水面が落ちました。これはやはり長岡の水がなくなってきた大きな原因ではないかと思っていますが。

(豊 口):今日伺ってみて、いろいろな社会的な問題も我々は抱えているような気がするのです。これから8回、自由大学が開かれるのですけれども、その中で広く視点を広げながら、もう一度、信濃川と生活との関わりを詰めていきたいと思います。時間がまだ少しございますが、何かご質問があればお受けしたいと思います。

(稲 川):最後に言うておきますが、昔、信濃川の水で顔を洗うと美人になるということわざがあったのです。したがって信濃川の水を切り売りして、是非美人になる水だというふうにして売っていただければ有り難いと思っています。これは国土交通省の方をお願いいたします。昔、信濃川の水で、わざわざ1月1日に信濃川に出まして、真ん中で水をくんできてお茶を飲む習慣があったのです。舟で行って、それが一番茶といって一番の贅沢だったわけです。そして信濃川の水で顔を洗うと美人になる。

(豊 口):年齢は関係ないのですか。

(稲 川):年齢は関係ないでしょうね。そういう話があったので。

(豊 口):一生続けなければいけないとか、そういうのはないですか。

(稲 川):水道の水が信濃川から来ていますから、長岡の人はみんな美人だと思いますよ。

(豊 口):そういえばそうですね。12年前に来て、たしかにそうだな。きれいな人が多いなと思いました。

(会 場):豊口先生にはいつもお世話になっていますが、先生のお話を聞きまして、長岡の歴史とはまた別な形で、世界の水ということで最初のイントロでお話になりましたけれども、我々日本の大河である信濃川も、絶対的には水量が減っているのでしょうか。それからなぜ減ってきたのか。これを我々の子孫の、子供や孫に受け継いでいくわけですが、これに対しての対応の仕方とか、環境が大きく違ってきているのもつながっているのかなという感じがしますけれども、この辺が豊口先生が日本の中の水という大きな観点から、信濃川を大きな一つのモデルとしまして、長岡に在住している形の中でこの問題は大きく取り上げていかなければならないかと思っていますし、その中の方法論として、我々市民は豊口先生のアドバイスの中で市民運動を活発化していかなければならないかという形ですので、お考えがありました一言お願いしたいと思います。

(豊 口):川の水量が減っているか増えているかというのは、私、はっきり分かりませんが、長岡にいらっしゃる方に伺いますと、昔よりは流量が減っているのではないかというお話を伺ったことがあります。というのは、途中で川の水を活用している所が幾つかあるのだろうという気がするんですね。だけど、今現在流れている川の量を拝見しますと、十分を超えたぐらいの水が流れている。世界の川を見るとよく分かるのですけれども、流れている水が非常にきれいだという事ですね。ある人に言わせると、昔の川はもっときれいだったとおっしゃっています

けれども、今でも非常にきれいだとは私は思っています。これは川上の方の人たちの生活、川に対する一つの考え方だと思うのです。

ただ、世界のあちこちの川を見ますと、信濃川のようにきれいな水ではないんですね、もはや。特に中国の現状は、あまりよくないのです。黄河の水はもうなくなってしまった。あとは長江、かつての揚子江の水はということになります。今から三、四十年前ですが上海に行きますと、メタンガスで目が開けられないくらい川底からガスが上がってきている。ヘドロが川底に溜まっているわけです。上流の方へ上がっていきますと、生活污水がどんどん流れこんできて、結局ヘドロそのものが日本海にまで流れ込んできているのではないかと思うくらいなのです。

今、石油戦争が起こっています。エネルギー源として石油をどうするか。これははっきり我々の目の前で戦争が起こっているわけですからよく分かるのですけれども、エネルギー戦争と並行して、実は水の戦争が始まってきているということが言われているわけです。パレスチナで戦争が起こっていますけれども、砂漠地帯で今なぜ狭い国境線をあっちへやったりこっちへやったりしているかということ、地下水をいかに確保するかということが問題になっているというふうに聞いています。ですから、既に水の確保で戦争が起こってきているということが言われています。

そういう意味では、本当に我々が使えるような水が将来どうなるのかというのは、全世界的な問題になっているわけです。私たちは信濃川という川を見て生活をしていまして、その恩恵をつい忘れがちになるのですけれども、これだけの素晴らしい川を、もう1回流域に住んでいる市民たちの力によって、母なる大河として、きれいな水を湛える川として大切にしなければいけないと思うのです。父なる大河なんてありませんから。その母なる大河を是非、私も微力ですけれども、信濃川の魅力に取りつかれておりまして、何とかして素晴らしい川として子孫に伝えていければいいと考えているんですね。

世界の川は確かに汚れています。日本の川はまだ十分蘇生する力を持っているし、特にその中でも信濃川というのは、私の見ただけではトップクラスの川だろうと思っています。その周辺にこれだけの文化があるわけですから、その文化も大切にしなければいけないという気はいたしております。これからあと7回、こういう話があちこちで行われますけれども、その中で新しい一つの方向が、はっきりと見えてくるのではないかと考えています。

それでは用意されました時間がきまりましたので、この辺で第1回の自由大学を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(司 会) : 豊口先生、稲川先生、ありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いいたします。

それでは最後に、主催者であります信濃川河川事務所所長、宮川勇二よりご挨拶をさせていただきます。

(宮 川) : 信濃川河川事務所長の宮川と申します。本日は、豊口先生、稲川先生、どうもありがとうございました。そして皆さん、長時間ご清聴いただきまして大変ありがとうございました。

今回、「われら信濃川を愛する自由大学」ということで、新潟日報さんのご賛同を得て一緒に開催させていただくはこびとなって、今回第1回ということで、両先生にいろいろお話をお聞きしたということでございます。信濃川については、昔から非常に豊かなそして美しい川だと、歌などにも詠まれていますし、また今日のお話にもいろいろ、世界水フォーラムのお話から長岡城のお話からはじまって、いろいろ歴史、文化、芸術、多方面にわたるお話をお聞かせいただいたわけでございますけれども、特に感じるのは、流域の皆様方に愛されていると、非

常に豊かな日本有数の大河だなと感じているところは大きいところでございます。

ただ、最近はもともと川が交通の大きな手段に利用されていたところから、今は家が川の方に向いていないとか、そういうお話もありましたが、川と生活との結びつきが、昔と比べると薄れてきているということございまして、信濃川を管理させていただく我々としても、もっとたくさんの方々に川というものの現状をよく知っていただいて、今回のテーマでもあります「われら信濃川を愛する」と、信濃川を愛する方々を増やす、あるいはもっともっと深く愛してもらうということを、是非していきたいということで今回はじめさせていただいたわけでございます。第1回ということで今回始めさせていただきましたが、第2回目は来月新潟市で行われますし、来年5月まで流域の各地を回って、いろいろ楽しいお話をさせていただいて、そういう形で愛していただく方々を増やしていこうというふうに思っておりますので、お時間の許すかぎり、2回目、3回目、ご参加いただければありがたいと思っております。本日は大変ありがとうございました。

(司 会) : 以上をもちまして「われら信濃川を愛する」信濃川自由大学第1回講座を終了いたします。本日は長時間にわたりご参加いただきまして誠にありがとうございました。

お帰り際にはお忘れ物のごきませんよう、ご注意ください。また、皆様にお配りしたアンケートは是非ご記入いただき、受付の前にございますアンケート回収箱にお入れください。皆様のご協力をお願いいたします。会場を出られる際には混雑いたしますので、お足元にはご注意ください。本日はご来場いただき、誠にありがとうございました。